



平成 26 年度第 1 回企画展

身のまわりの生活史9

モノを入れる～収納あれこれ～

平成 26 年 5 月 17 日(土)～7 月 13 日(日)

宮代町郷土資料館

ごあいさつ

昭和30年代から40年代にかけての高度経済成長期を境にして、私たちの生活の様子は大きく変化しました。その変化は、生活様式や服装、家屋、その他、私たちの生活にかかわるものの総てといっても過言ではないでしょう。

科学や工業技術などの飛躍的な進歩もあって、より豊かで便利な生活ができるようになりました。例えば、わたしたちの周りを見渡すと、石油系の合成樹脂、いわゆるプラスチックを使用した多種多様の商品が多く扱われています。それらは、それ以前の人が天然素材で作ったモノと役割を交代したもので、安価になったり、扱いがしやすくなったり、種類が増え選択肢が広がったりなど、多くの利点があったものでした。

こうした変化のなかで、それまで使用されてきたモノたちの中には、その存在すら忘れ去られてしまったモノがある一方で、時間と手間を使って生み出されるものなどは、以前よりも一層贅沢な印象を与えるモノとなったものもあります。



今回の企画展では、「身のまわりの生活史9 モノを入れる～収納あれこれ～」と題し、多くの収蔵品の中から「収納する」というモノを入れておく道具類をテーマにして資料を紹介いたします。これらの資料を通して、私たちの生活の大きな変化に眼を向け、暮らしや環境に対して改めて思いを寄せるきっかけとなっただけであれば幸いです。



平成26年5月
宮代町郷土資料館

～ 凡 例 ～

- 1) 本書は、平成26年5月17日から7月13日まで開催される、宮代町郷土資料館 平成26年度第1回企画展「身のまわりの生活史9 モノを入れる～収納あれこれ～」の展示図録です。
- 2) 期間中の休館日は次の通りです。 5月19・26日、6月2・9・16・23・30日、7月7日
- 3) 展示の企画及びポスター・図録の執筆、写真撮影、デザイン、編集等は、当館学芸員 横内美穂が担当しました。
- 4) 企画展の開催にあたっては、下記の方々に寄贈いただいた資料を使用させていただきました。また展示物以外にも、多くの住民の皆様より貴重な資料を寄贈・寄託されています。関係の皆様のお理解・御協力に厚く御礼申し上げます。
展示資料の寄贈者（敬称略・五十音順）
青木佐太・池澤俊哉・小河原悦子・小河原進・折原一・金子和生・小島雅郎・斉藤繁・白川由利子・高畑博・中村忠男・成田総一・福田政義・谷澤良明・吉岡郁子・渡辺恵司

はじめに

わたしたちの身のまわりには、さまざまな道具があります。そのいずれもが、利便性や快適性などを求めて作り出されてきたものです。そして、一般的に「衣食住」といえば、私たちの生活の最も基本となるものです。生活のための多くの道具があり、みなさんもそれらを使用して、より生活しやすいようにと工夫をしていることと思います。

そういった道具の多くは、昔の人々も使用していた道具が基本となっています。それらの中には、現在のわたしたちが使用しているものと比較したときに材質や作られ方などに大きな変化があったり、あるいは用途そのものが無くなったために使われなくなったりしたものもあります。資料館には、かつて使われてきた道具の数々が、資料として保管されています。

今回の展示では、そういった数々の道具の中から、衣生活・食生活・住生活という3つの項目を主題に、「モノを入れて使用する道具」をご紹介します。

食生活

「食べる」ということは、生きていくうえでとても重要です。そして、人は田畑で耕作し家畜を飼うなどすることにより、食べ物を恒常的に入手できるように工夫しました。また、より安全で美味しいものをと、田畑に施肥をし、食物の保存環境に工夫をするなどしました。

このコーナーにある諸道具は、「食べる」モノに関する道具です。食事のときに使用するもの、あるいは食物を入れて運んだり保存したりしたものなどです。

生活スタイルが大きく変化した今では使われることのなくなったものが多いです。

コエオケ（肥桶）

金子和生氏寄贈

肥にするための糞尿を肥溜まで運んだり、畑などに施肥するための肥を運んだりするために使われた専用の桶です。天秤棒の両端に桶をつり下げて、肩にかついで運びました。



ビク（魚籠）

折原一氏寄贈

魚釣りの際に使用する竹製の籠です。川などで水の中に入れておき、釣り上げた魚を生きのままに入れておくことにより、魚の鮮度が落ちることを防ぐための道具です。



コメビツ（米びつ）

白川由利子氏寄贈 昭和初期

食用の米を入れておく容器です。これはブリキ製です。この他、瓶や木箱など家庭により米の保管容器はいろいろでしたが、米につくコクゾウムシなどの幼虫は顎が強いため、紙製や木製の容器では入り込みやすく、瓶は割れやすいことなどから、昭和の半ば頃までブリキの米びつを愛用した家庭も多かったようです。



オカモチ（岡持） 小河原進氏寄贈

料理や食器などを持ち運ぶ際に使う、蓋付きの桶の一種です。宮代町周辺の地域では、田植えや稲刈りなど農耕作業のほとんどが人力で行われていた時代には、屋外作業の際にシヨイメシ（炊きたてのご飯に醤油をかけて味付けしたおにぎり）などの食事を運ぶためなどに使用されました。



オヒツイレ

中村忠男氏寄贈

昔も今も変わらないかもしれませんが、特に農家などでは昼間は農作業に従事する

ため、炊飯は朝晩の2回行われていました。朝には3升から5升炊きの釜で昼飯の分まで炊きました。朝飯が終わると、残ったご飯はオヒツ（飯びつ）に移しておきました。冬場、そのまま置いておくと凍ったようにご飯が冷たくなってしまうのを防ぐために、藁で編んだものに紙を張ったりした保温用具を使用しました。

ハコゼン（箱膳）

中村忠男氏寄贈

昭和20年頃より以前は、日常の食事にはハコゼンが使われました。ハコゼンにはめいめいの茶碗、汁椀、小皿、箸などを入れておき、食事の際にはハコゼンの蓋をひっくり返してこれらの食器をのせました。食事が済むと、食器に茶を注いで飲み干してから中に伏せていれ、蓋を被せて戸棚



にしまいました。食器を洗うのは一か月に数回程度でした。

昭和20年を過ぎた頃から、ハコゼンではなくチャブダイ（卓袱台）に家族分の食器を並べて食事を取る家が多くなり、使われることがなくなりました。

染付牡丹唐草文蓋物

小島雅郎氏寄贈 江戸時代

器の縁にすかし模様のようなデザインが施されたこの器には、手書きで唐草文と牡丹の花が描かれています。乗せているだけに近い蓋の閉まり具合からも、汁気を伴う料理よりは、汁気の少ない料理が似合う器となっています。



染付二鹿遊山図中皿

小島雅郎氏寄贈 江戸時代

もともとは5枚一組であったと思われる、中くらいの大きさの平皿です。山にいる2頭の鹿とその周りに松と蕨のような草を散らすように描かれています。それぞれの皿を比較すると、同じように描かれているものの微妙に違う筆遣いが、手書きであることを示しています。

祝いの席などで使われたものと思われます。



住生活

昭和 30 年代の高度成長期以前は、住宅といえばほとんどが木造でした。屋根の材料も茅や藁などが多く用いられ、私たちが現在住んでいるような家屋と比べると、防火という点については弱い面がありました。

そのため昔の人々は、いざという時にすぐに持ち出せるようにということを意識していたようです。懸硯のような小型の筆筒や、車筆筒のように大型で下に車輪がついているものなどから、その工夫がうかがえます。

また、私たちの生活スタイルや家屋の工法そのものの変化を伺えるものとしては、学習机でもある文机や、暖房器具である長火鉢などが挙げられます。

私たちの周りを見渡すと、多くのものが高度成長期以降に劇的に変化していることがわかります。それらのほとんどが、科学や工業技術の飛躍的な進歩によるものです。

ゼニバコ（銭箱）

谷澤良明氏寄贈 江戸～明治時代

日本で発行された貨幣にはさまざまな種類があります。江戸時代には大判や小判といった硬貨（金属製の貨幣）がありましたが高額でもあったため、主に使われたのは小額貨幣の銭でした。

商売をしていた家では、売り上げの管理をこのゼニバコでおこなっていました。

ゼニバコの正面には器部分とふた部分に金具がつけられ、錠前がかけられるようになっています。上部にあいた穴は小さく、手は入りませんが銭は入ります。商売中は、客より代金として受け取った銭をこの穴より投げ込んでおき、閉店後、戸締りをしてから錠前をあげ、その日の売り上げを計算するのです。



カケズリ（懸硯） 高畑博氏寄贈・福田政義氏寄贈

カケズリは船筆筒と呼ばれる小型の筆筒の一種です。上部にある蓋を開けたところには、硯や筆などをいれておきました。それより下にある抽斗には、巻紙や印鑑などを入れました。鍵のかかる抽斗もあるため、大切なものを入れる小型金庫のような使い方もされました。

ツクエ（文机） 大正 12 年

裏側に「大正拾二年」という墨書のある文机です。貼られたシールは昭和 30～40 年代のものであり、使用者が複数人にわたることがうかがわれ、家庭において大切に使われてきた様子が想像できます。



ナガヒバチ（長火鉢）

齊藤繁氏寄贈 明治時代

冬季の暖房器具である火鉢の一種で、主に居間などで使われました。木製ですが内側に銅板が張られています。中央には五徳と一体化した銅壺があります。銅壺には水をいれておき、火鉢の炭の熱でお湯が沸くようになっていました。いくつかの抽斗がありますが、ここにはキセルやタバコなどのほか、身のまわりにあって日常的に使う小道具などを入れていました。



コウリ（行李）

青木佐太氏寄贈 明治時代

コウリは柳や篠竹などで編んだ四角いふた付きの籠で、さまざまな大きさがあります。

これは小さいコウリで、小さいものは主に手紙や書類などの保管や、あるいは弁当箱としても使われたりしました。



このコウリが寄贈されたときには、明治時代の古文書が入れられた状態でした。

コバコ（小箱）

吉岡郁子氏寄贈

手元においていろいろな小物を収納しておくことから、テバコ（手箱）とも呼びます。抽斗の表に生地を貼り付け、その上に虞美人草（ヒナゲシ）らしき花をデザインしています。銘仙の柄に通じるような大胆なデザインが女性好みであり、身のまわりの小物を入れていたことを想像させます。



コヒキダシ（小抽斗）

小河原悦子氏寄贈 江戸～明治時代

片開きの扉がついたこの抽斗は、カケスズリなどと同じ船筆筒の一種です。上部に持ち手がなく、

金具もほとんどついていないことから、机代わりに使用された可能性があります。



衣生活

私たちは四季折々の気候にあわせ、身につける衣類の材質や厚みなどを替えています。また、昔はいわゆる和服であったところが、現在は洋服が中心となり、素材や形の種類も昔より多くなっています。また、衣類の変化に伴い、その保管方法にも変化がみられ、それは住生活の道具に影響を与えています。

衣類などの収納方法については、家屋構造の変化が大きく影響を与えています。昔の家屋のように、襖や障子で仕切られ壁が少ない構造の場合では、タンスや長持、行李といった道具を使用しての収納でした。しかし近年の家屋構造では昔に比べて壁の部分が多く、密閉性も高まり、あらかじめ収納スペースを意識した構造であることが多くなりました。



シブハリコウリ（渋張行李） 吉岡郁子氏寄贈

竹を割って作ったヒゴで編み、表に紙を張って柿渋を塗ったものです。大変軽いので、主に衣装箱として使われました。表の一部に「単衣」と書かれた紙が張り付けてあることから、この家庭では夏物の着物を保存していたものようです。



カドカワヤナギコウリ（角革柳行李）

池澤俊哉氏寄贈

行李の一種で、素材は柳です。角を革で補強し、脇にベルトを通して固定すると、鞆のように持ち運べるようになっていきます。通気性が良く軽いため、旅行鞆としても使われました。



コウリ（行李）

篠竹を割って作ったヒゴを編んで作られています。篠竹ではいろいろな大きさの行李を作ることができたので、主要な材料の一つでした。

この大きさは、主に衣装類を入れてつかう事が多かったようです。

タンス（箆筒）

成田総一氏寄贈 大正時代

桐製のこのタンスは、3つに分けることができます。扉や抽斗の総てに鍵をかけることができるようになっています。（丸い穴の開いた金具の部分が鍵穴となっています。）

上段の扉を開けると、浅い抽斗が4段あり、畳んだ着物を入れるようになっています。中段は引き戸と3つの抽斗があり小物類や書類などを入れられるようになっています。下段は大きな抽斗が二つで、衣装類のなかでもこまごまとしたものをに入れて使うなどしたようです。



コウリ（行李） 渡辺恵司氏寄贈

篠竹を割って作ったヒゴを編んで作られています。やや小ぶりですが、これも衣装類を入れて使われることが多かった大きさです。中に反物の包装紙が入っていたので、この家庭では生地類を保管していたのかもしれませんがね。



サイホウバコ（裁縫箱）

渡辺恵司氏寄贈 昭和初期

裁縫道具を入れていたものです。上部の蓋を開けた部分には、作業のときに針を休めることができるように針山などをいれていました。一番下の抽斗は裁ちばさみなどを入れるのに適していたようです。

このほか、糸や端切れなどいろいろな道具が納められ、使用するときには明るいところに持ち運び、作業をするのに便利でした。





宮代町郷土資料館

〒345-0817 埼玉県南埼玉郡宮代町字西原 289

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

HP <http://www.town.miyashiro.saitama.jp> Eメール museum@town.miyashiro.saitama.jp